
 原著論文

保育者が捉える子どもの身体活動の様相

ー領域「健康」の視点からー

Physical activities of children as perceived by nursery teachers

: From a standpoint of “health”

国府田はるか

Key words ; 幼児と健康 身体活動 運動 領域「健康」 保育者

1. 緒言

文部科学省の「体力・運動能力調査」¹⁾の分析によると、青少年（6歳から19歳）の体力・運動能力は、水準の高かった昭和60年頃と比較すると依然低い水準になっているものの、平成10年頃に歯止めが掛かり、近年10年において総合的には横ばいまたは向上傾向を示している。また、青少年の「週1日以上」の運動・スポーツ実施率の割合や「運動を1日もしない」と回答した者の割合は、特に女子においては年齢間の差が顕著に大きいものの、30年余りにわたる平成の時代を通じてほとんど変化がみられずほぼ横ばいで推移しているという。

平成28年度調査からは、運動・スポーツの多面的な価値を問う「入学前の外遊び」「達成意欲」「生活の充実度」「運動・スポーツのストレス解消効果」に関する質問項目が追加された。特に、「入学前の外遊び」について、平成28年度～平成30年度の3年間の結果に注目すると、男女ともに入学前の外遊びの実施頻度が高いほど、現在の運動・スポーツ実施頻度の高い者の割合が多くなっており、「幼児期に外遊びをよくしていた児童は、日常的に運動し、体力も高い」という分析結果が見て取れる。文部科学省は、前掲の調査結果の分析の中で、「幼児期に外で体を動かして遊ぶ習慣を身につけることが、小学校入学後の運動習慣の基礎を培い、体力の向上につながる要因の一つになっている」と結論づけている。

また、「達成意欲」についても、達成意欲を強くもつ者ほど体力合計点が高いとの結果が報告され、「日常的に運動・スポーツを実施している青少年期の子供の多くは、なんでも最後までやりとげたいと思っている」との分析がなされている。

平成 30 年より施行された「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」に示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」には、保育所の生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる「健康な心と体」や、身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる「自立心」等が挙げられている。幼児期の運動・スポーツや戸外遊びは、生涯を通じての体力・運動能力向上への影響のみならず、「やりとげる力」や「あきらめない力」といった非認知能力の観点からみても大きな意義があることが明確になったと言えよう。

次に、本研究と関連する先行研究の中で主なものを以下に列挙し、これまでの関連研究の動向を整理する。

新戸らⁱⁱ⁾は、保育内容「健康」領域の視点から保育内容の検討を行うため、保育中の心拍数測定を行うことにより、各身体活動の運動強度レベルを検討している。160 拍/分以上の強い運動強度の活動は連続縄跳びであり、鬼ごっこ・追いかけっこ、ボール遊び、縄あそび、バランスボールは平均 130~159 拍/分の中程度の運動強度、砂遊びは 129 拍/分以下の弱い運動強度であるとし、「子どもの活発な活動を誘引する園内環境と保育者の関わり方」の重要性にも言及している。

田中ⁱⁱⁱ⁾は、幼児の身体活動を行う際に保育者は、「運動能力の向上や生活リズムの改善を促すことを意識」しており、「保育者が参照できる幼児の身体活動に関する何らかのモデルや指標が必要である」と示唆している。また田中^{iv)}は、「運動能力の群間における身体活動について量的・質的側面から検討」を行った結果として、幼児の運動能力と身体活動との間の関連性を示唆しており、特に「降園後の遊び方に関して、運動能力が高い幼児は身体活動量・強度ともにより活発な遊びを展開」していることから、「降園後も身体を動かして遊べるような動機づけや、幼児期における身体活動や運動遊びの意義について保護者への啓蒙が重要な意義を持つ」点を指摘している。

多胡^{v)}は、幼稚園・こども園における子どもたちの身体活動状況や幼児期運動指針の実践について、現役の幼稚園教諭・保育教諭へのアンケート調査の分析を中心に検討している。その中で、子どもたちは「進んで運動する」ものの、「生活リズムが乱れている」「姿勢保持ができない」「活発な子どもと不活発な子どもの二極化」「疲れやすい子ども」が多いといった運動状況を明らかにしている。

田中ら^{vi)}は、「からだの使い方がわからない子ども」についての実態調査を行い、「見えに

くさ」「ボディイメージの不足」「運動の獲得機会の減少」等の原因を指摘している。

2. 研究目的

本研究では、先行研究を踏まえた上で、保育者への質問紙調査から得られたデータをもとに、I 県内の保育現場における乳幼児の身体活動の実際を報告する。その上で、子どもの保育を担う現場の保育者が、乳幼児の身体活動・身体表現に関してどのような点を問題として捉えているかを明らかにすることを試みる。これらにより、乳幼児期に望ましい身体活動および身体表現の在り方を検討するとともに、領域「健康」の視点から、乳幼児期の身体活動および身体活動について見つめ直し、保育者が捉える子どもの身体活動の様相を明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

本研究では、令和元年8月21日・22日、9月14日・15日に、I 県内の幼稚園・保育園・認定こども園（計84園）に勤務する保育者104名（うち20名は現場を一時的に離れている）を対象に実施した、「保育現場における乳幼児の身体活動」に関する自由記述式質問紙の回答を研究対象とする。自由記述式質問紙の項目は、以下の2項目であった。

【設問1】実際の現場では、どのような「運動遊び」「身体表現遊び」を実践しているか、なるべくたくさん書き出してください。

【設問2】現代の子どもの「身体活動」「身体表現」に関する問題点について、現場での経験をふまえて記述してください。

研究方法としては、KHcoderを用いた自由記述式質問紙のテキストマイニング分析を行う。有効回答数は104であった。

質問紙調査の実施および研究へのデータの使用にあたっては、匿名性を確保した上で研究に使用する旨を書面および口頭で伝え、承諾を得た。

4. 結果および考察

4-1 現場での運動遊び・身体表現遊びの実態

(1) 自由記述で挙げられた運動遊び・身体表現遊び

まず、【設問1】「実際の現場で実践されている「運動遊び」「身体表現遊び」」に関して、挙げられた運動遊び・身体表現遊びの項目を全てデータ化し、類似性のある種目を統合した上で、出現回数10回以上の種目（計21種）を上位順に並べた結果を以下のFig.1に示す。

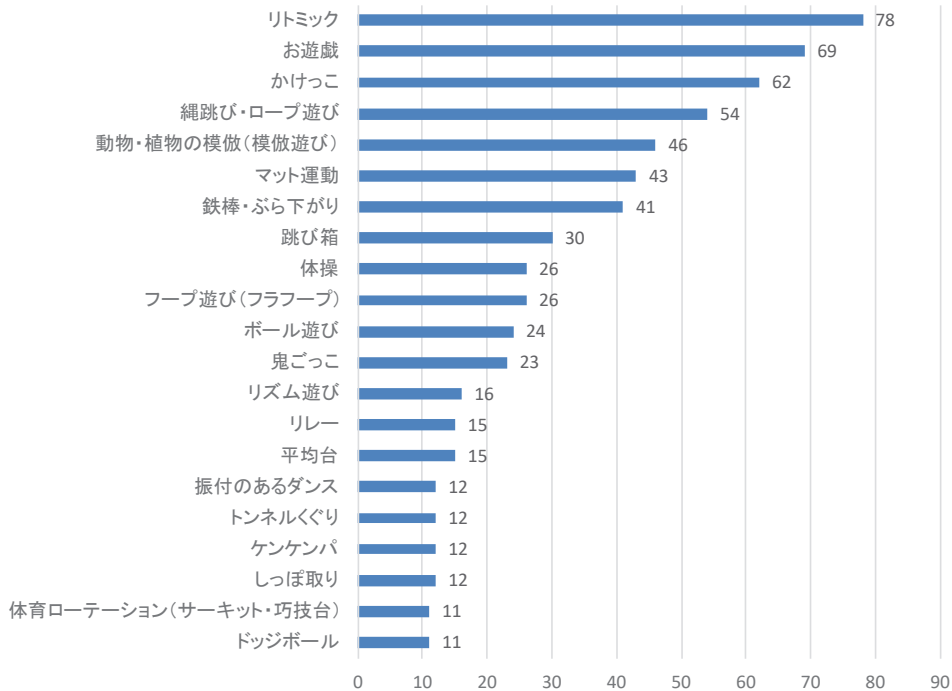


Fig.1 現場での運動遊び・身体表現遊びの実態

Fig.1 に示すとおり、出現回数が多い順に、リトミック(78)、お遊戯(69)、かけっこ(62)、縄跳び・ロープ遊び(54)、動物・植物の模倣(模倣遊び)(46)、マット運動(43)、鉄棒・ぶら下がり(41)、跳び箱(30)、体操(26)、フープ遊び(フラフープ)(26)、ボール遊び(24)、鬼ごっこ(23)、リズム遊び(16)、リレー(15)、平均台(15)、振付のあるダンス(12)、トンネルくぐり(12)、ケンケンパ(12)、しっぽ取り(12)、体育ローテーション(サーキット・巧技台)(11)、ドッジボール(11)となった。()内は出現回数。

出現回数5回以上10回未満の遊び(計13種)は、大縄(9)、マラソン(9)、うんてい(9)、登り棒(9)、ストレッチ(柔軟体操)(9)、手遊び(8)、新聞紙遊び(8)、変身遊び(なりきり遊び)(6)、曲に合わせた自由な動き・ダンス(6)、だるまさんがころんだ(6)、遊具・アスレチック(5)、パラバルーン(5)、椅子取りゲーム(5)と続く。

その他、出現回数4回6種(ヒップホップダンス、サッカー、ケイドロ(ドロケイ)、ごっこ遊び、雑巾がけ・雑巾リレー、色鬼)、3回11種(三輪車、一輪車、盆踊り、ボルダリング、へび鬼、山登り・築山登り・土手登り、組体操・組立体操、イメージ遊び(表現遊び)、プール、トランポリン、障害物競走)、2回25種(ハンカチ落とし、三輪車、わらべうた、

玉入れ、氷鬼、竹馬、ジャンピングマット、伝承遊び、かくれんぼ、滑り台、爆弾ゲーム、バナナ鬼、綱引き、ロディー、さくらさくらんぼ、絵本を通しての身体表現、飛び石・石跳び、大型積み木、ゴム跳び、パカポコ・牛乳パックポックリ、バトンタッチ、ふれあい遊び、ハイハイ競争、劇遊び、ミュージックケア)、1回63種(手押し車、じゃんけん鬼、帽子取り、はないちもんめ、お座り相撲、木登り、じゃんけん列車、陣地取り、チキチキバンバン、どうぶつ体操、スキップ、ネットくぐり、側転、器械運動、ボール運び、ボール渡し、太鼓橋、波くぐり、タッチ鬼、ジェスチャーゲーム、逆立ち、カラーガード、新体操、よさこい、色遊び、ジャングルジム、音楽あそび、柳沢運動遊び、大の字鬼、芝滑り、ミュージックプレイス、風船遊び、風船マット遊び、コンビカー、キャップ落とし、ハードル跳び、ロープ登り、振り付き歌、ベビーマッサージ、紐跳び、和太鼓、電車ごっこ、水遊び、バランスボール、高鬼、お手玉、橋渡し、コーン取りゲーム、増やし鬼、むっくりくまさん、スクーター乗り、ホッピング、はしご、階段遊び、ソフトブロック、ヒーローごっこ、ストップ&ゴー、拍子打ち、ロッククライミング・ウッドクライミング、鳴子、ボール鬼、散歩、50m走)の遊びが確認された。

以上のように、自由記述で挙げられた運動遊び・身体表現遊びの項目は全139種であった。

(2) 現場での運動遊び・身体表現遊びの整理・分類

次に、自由記述で挙げられた139種すべての種目の整理・分類を行うために、

- A【器械遊び(固定された器具を用いる遊び)】
- B【道具を用いた遊び(固定されていない器具・手具を用いる遊び)】
- C【徒手遊び(器具・手具を用いない遊び)】
- D【音楽を用いる遊び・表現遊び】

の4つのカテゴリーへの分類を試みた。

さらに、B【道具を用いた遊び(固定されていない器具・手具を用いる遊び)】を

- ①縄を用いた遊び
- ②フープを用いた遊び
- ③ボールを用いた遊び
- ④乗り物を用いた遊び
- ⑤その他の道具・器具・手具を用いた遊び

の5つの小カテゴリーに分けた。

同様に、C【徒手遊び(器具・手具を用いない遊び)】を

- ①鬼ごっこ

②その他の徒手遊び

の2つの小カテゴリーに分け、D【表現遊び・音楽を用いる遊び】を

①ダンス

②その他の表現遊び・音楽を用いる遊び表現遊び

の2つの小カテゴリーに分けた。

それぞれのカテゴリー中の抽出数も合わせて以下のTable.1に示す。

Table.1 現場で実践されている運動遊び・身体表現遊びの分類

大カテゴリー	小カテゴリー	現場で実践されている運動遊び・身体表現遊び	抽出数	合計抽出数
A【器械遊び(固定された器具を用いる遊び)】	—	鉄棒・ぶら下がり、跳び箱、マット運動、平均台、トンネルくぐり、体育ローテーション・サーキット・巧技台、うんてい、登り棒、固定遊具・アスレチック、ボルダリング、トランポリン、ジャンピングマット、滑り台、飛び石・石跳び、木登り、器械運動、太鼓橋、ジャングルジム、ロープ登り、高鬼、はしご、階段遊び、橋渡り、ロッククライミング・ウッドクライミング	24	24
B【道具を用いた遊び(固定されていない器具・手具を用いる遊び)】	①縄を用いた運動	縄跳び・ロープ遊び、大縄、綱引き、ゴム跳び、紐跳び	6	46
	②フープを用いた遊び	フープ遊び・フラフープ、ケンケンパ	3	
	③ボールを用いた遊び	ボール遊び、ドッジボール、サッカー、爆弾ゲーム、ボール運び、ボール渡し、バランスボール、ボール鬼	8	
	④乗り物を用いた遊び	一輪車、三輪車、ロディー、コンピカー・乗用玩具・足蹴り車、スクーター乗り	5	
	⑤その他の道具・器具・手具を用いた遊び	新聞紙遊び、バラバルーン、椅子取りゲーム、しっぽ取り、リレー、雑巾がけ・雑巾リレー、ごっこ遊び、玉入れ、障害物競走、竹馬、大型積み木、ソフトブロック、バカボコ・ぼっくり・牛乳パックぼっくり、バトンタッチ、帽子取り、ネットくぐり、波くぐり、キャップ落とし、風船遊び、風船マット遊び、ハードル跳び、コーン取りゲーム、ホッピング、お手玉	24	
C【徒手遊び(器具・手具を用いない遊び)】	①鬼ごっこ	鬼ごっこ、ケイドロ・ドロケイ、色鬼、へび鬼、ハンカチ落とし、だるまさんがころんだ、氷鬼、かくれんぼ、バナナ鬼、じゃんけん鬼、タッチ鬼、大の字鬼、増やし鬼、むっくりくまさん	14	40
	②その他の徒手遊び	かけっこ、体操、マラソン、ストレッチ・柔軟体操、山登り・築山登り・土手登り、組体操・組立体操、プール、水遊び、伝承遊び、ふれあい遊び、ハイハイ競争、手押し車、はないちもんめ、相撲・お座り相撲、じゃんけん列車、陣地取り、スキップ、側転、逆立ち、新体操、色遊び、柳沢運動遊び、芝滑り、電車ごっこ、50m走、散歩	26	
D【表現遊び・音楽を用いる遊び】	①ダンス	振付のあるダンス、曲に合わせた自由な動き・ダンス、盆踊り、ヒップホップダンス、よさこい、振り付き歌	6	29
	②その他の表現遊び・音楽を用いた遊び	リトミック、音楽あそび、お遊戯、リズム遊び、動物や植物の模倣・模倣遊び、手遊び、変身遊び・なりきり遊び、イメージ遊び・表現遊び、わらべうた、さくらさくらんぼ、絵本を通しての身体表現、劇遊び、タッチ鬼、ミュージックケア、ジェスチャーゲーム、マーチング・カラガード、ミュージックプレイス、ベビーマッサージ、和太鼓、ヒーローごっこ、ストップ&ゴー、拍子打ち、鳴子	23	

4-2 乳幼児の身体活動・身体表現に関する問題点

次に、【設問 2】に関して自由記述式質問紙の記述を全てテキストデータ化し、KHcoderを用いてテキストマイニング分析を行った結果、総抽出語数は7040、異なり語数は883であった。

下記の Table.2 に、「現代の子どもの身体活動・身体表現に関する問題点」についての自由記述の頻出 150 語を示す。

Table.2 現代の子どもの「身体活動」「身体表現」に関する問題点 (頻出 150 語)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	192	少し	8	作る	4
身体	95	体操	8	足	4
表現	81	友達	8	知識	4
多い	72	遊ぶ	8	動ける	4
遊び	49	リトミック	7	入れる	4
思う	42	怪我	7	不足	4
動かす	42	機会	7	目	4
感じる	38	興味	7	様子	4
見る	26	現場	7	〇〇	3
少ない	26	今	7	ぎこちない	3
保育	24	手	7	カリキュラム	3
動き	23	出る	7	ケンケンバ	3
恥ずかしい	20	小さい	7	ザリガニ	3
楽しい	19	大切	7	ジャンプ	3
動く	19	疲れる	7	パス	3
自分	18	テレビ	6	バランス	3
増える	18	決まる	6	リズム	3
苦手	17	現代	6	外	3
経験	17	思いきり	6	覚える	3
一緒	16	弱い	6	掛ける	3
自由	16	生活	6	慣れる	3
動物	16	声	6	顔	3
取り入れる	14	踊る	6	帰る	3
遊戯	14	力	6	気	3
楽しむ	13	ダンス	5	強い	3
活動	13	意識	5	教師	3
イメージ	12	音楽	5	決める	3
運動	12	環境	5	見本	3
園	12	嫌がる	5	現在	3
使う	12	見せる	5	言葉	3
時間	12	戸外	5	言葉かけ	3
真似	12	合わせる	5	個別	3
難しい	12	今日	5	行く	3
遊ぶ	12	姿	5	行事	3
家庭	11	室内	5	自信	3
硬い	11	集団	5	自身	3
行う	11	色々	5	実際	3
持つ	11	声かけ	5	取り組む	3
分かる	11	体力	5	周り	3
言う	10	年齢	5	柔軟性	3
大きい	10	必要	5	出せる	3
転ぶ	10	模倣	5	初めて	3
伝える	10	踊り	5	床	3
ゲーム	9	立つ	5	上手	3
先生	9	たくさん	4	乗る	3
良い	9	のびのび	4	場	3
減る	8	クラス	4	場所	3
言う	8	家	4	人	3
好き	8	気持ち	4	昔	3
参加	8	考える	4	他	3

自由記述に含まれる単語のみを抽出した Table.2 から、「動かす」(42)、「動き」(23)、「動く」(19)、「遊戯」(14)、「活動」(13)、「運動」(12)、「家庭」(11)、「硬い」(11)、「転ぶ」(10)、「体操」(8)、「リトミック」(7)、「怪我」(7)、「機会」(7)、「疲れる」(7)、「テレビ」(6)、「弱い」(6)、「力」(6)、「ダンス」(5)、「戸外」(5)、「体力」(5)、「踊り」(5)、「動ける」(4)、「不足」(4)、「ぎこちない」(3)、「バランス」(3)、「リズム」(3)、「行事」(3)、「柔軟性」(3) (() 内の数字は出現数) といった「健康」に関連するキーワードが

散見される。

次に、これらの抽出語をもとに共起ネットワークを作成し、Fig.2 に示した。ここでは、出現回数3回以上の語を抽出し、描画する共起関係は上位150とした。比較的強くお互いに結びついている部分を自動的に検出してグループ分けを行い、その結果を色分けによって示すサブグラフ検出により作図したものに加筆し、A~H群を○で囲み示した。検出の手法としては、共起関係 (edge) の媒介性にもとづく Newman& Girvan の方法 による。

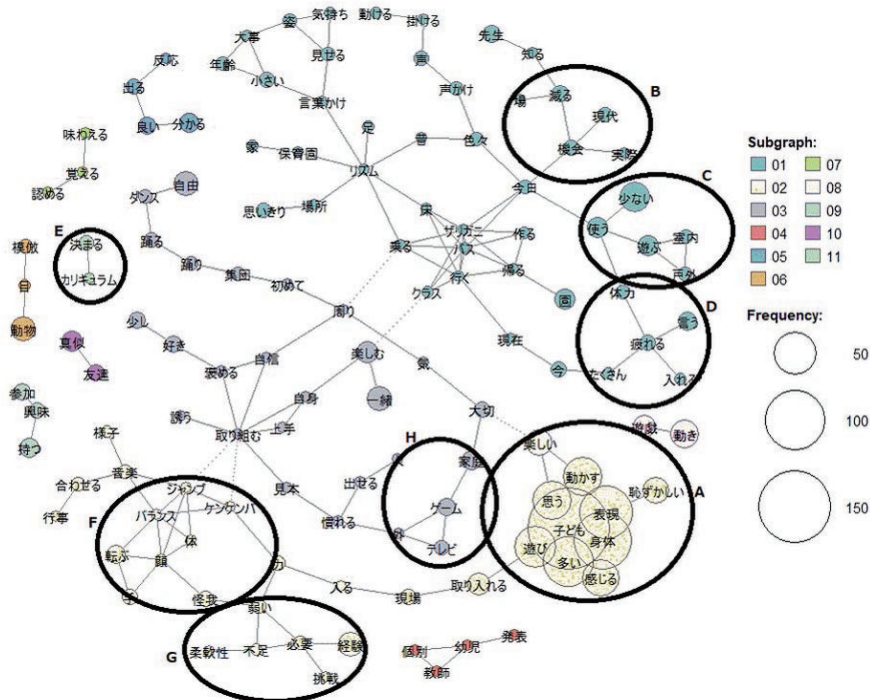


Fig.2 現代の子どもの「身体活動」「身体表現」に関する問題点 (共起ネットワーク図)

Fig.2 は、子どもの「表現」に関する問題点のみならず、図中の A~H 群に示したように、「健康」面での問題点をも浮き彫りにしている。関連性の高い A~H 各群から見出すことのできる結果を以下に示す。

- A: 「子ども」は本来「身体」を「動かす」「遊び」を「楽しい」と「感じる」
- B: 「現代」では「実際」に身体を動かす「場」や「機会」が「減」っている
- C: 「室内」で「遊ぶ」機会が多く、「戸外」での遊びは「少ない」

D:「体力」がなくすぐに「疲れた」と「言う」

E:「カリキュラム」が「決ま」っており自由な身体活動を実施できない

F:「ケンケンパ」や「ジャンプ」などで「体」の「バランス」を崩し、「顔」から「転」び「怪我」をしてしまう子どもがいる

G:「柔軟性」が不足し、身体の「力」も「弱い」ため、「挑戦」する「経験」が「必要」である

H:「家庭」でも「ゲーム」や「テレビ」で遊ぶことが多く「外」で遊ぶ機会は少ない

以上の結果より、乳幼児は本来、身体活動を十分に楽しむべきであるにもかかわらず、身体を戸外で動かす場や機会の減少により、体力の低下、バランス力の喪失、怪我の増加、柔軟性の低下等の様々な健康面での問題を抱えていると保育者が指摘している点が見いだされた。さらに、保育カリキュラムと乳幼児の身体活動の実態との差異も問題点として指摘された。

多胡^{viii}による子どもたちの状況についての保育者への質問紙調査の設問は、「子どもたちは進んで体を動かして遊びますか?」「子どもたちの体力低下を感じることがありますか?」「活発な子どもと不活発な子どもの二極化を感じることがありますか?」「疲れやすい子どもが増えたと感じることはありますか?」「怪我をしやすい子どもが増えたと感じることはありますか?」「生活リズムが乱れている子どもが増えたと感じることはありますか?」「猫背や背骨の歪み、姿勢保持ができない子どもが増えたと感じることがありますか?」「家庭において、体を動かして遊ぶ子どもが減ってきていると感じることがありますか?」「体を動かす遊びについて、保護者の理解や協力が得られないと感じますか?」という9項目である。そこで見いだされた、子どもたちは「進んで運動する」ものの、「生活リズムが乱れている」「姿勢保持ができない」「活発な子どもと不活発な子どもの二極化」「疲れやすい子ども」が多いといった結果とも、本研究の結果は合致していると言える。

以下に事例として挙げる保育者 a~j による記述文も、上記の分析結果を如実に示すものである。

保育者 a「身体を思いきり動かす経験をしてこなかった新入園児が多くなっているように思います。転んだ際に、手のひらではなく顔から倒れてしまったり、ジャンプの着地が定まらず転んでしまったり、バランス感覚の取れない様子が見られます。音楽に合わせて体を動かすことを恥ずかしいと思う子どもも多いようです。保育の現場でも、もっと身体を動かしたり、音楽に触れたり、心が弾むような経験をさせてあげられるようにしたいです。」(全文)

保育者 b「現代は、どこに移動するにも車であり、体力がない子どもが多いことが分かります。すぐに疲れたと言ったり、室内遊びが多かったり、戸外遊びでも身体を使って、遊ぶことが少ない。」(後略)

保育者 c「身体を思いきり動かせる場所、公園や広場などが少なくなり、また集団遊びより少人数や家の中での遊びが多くなっていったと思う。運動することが苦手な子どもも、幼稚園や保育園などで、まずは身体を動かすことも楽しさを感じられるように、遊びの中で、手や足を動かす、リズムに乗って身体を揺らすなど、小さな動きからやっていくことが大切だと思う。」(全文)

保育者 d「今の子どもたちは知らずのうちに身体表現をする場を減らされてしまっていると思う。保育者や保護者が遊びを決めて、自分で行動や表現することが少ない。今までは、親、先生だけでなく、地域の人々など、昔遊び、伝統など子どもをとりまく環境が充実していた。子どもたちにとって色々な刺激が減ってきてしまっている。」(全文)

保育者 e「全身を使った遊びをする経験が少なくなっているのか、身体が硬い子どもや体力のない子どもが目立つ。立っていても座っていても姿勢が悪い子どもも見られるので、身体を使った遊びができる時間を意図的に作っていくようにしている。」(全文)

保育者 f「身体の緊張が強く、身体が硬い。筋力がなく、足腰の力が弱い。体幹が弱い。一つ一つの遊びに集中できず、隣にいる子どもにちょっかいをかける子どもや、転びやすく、転んだ際に手が出せず顔を怪我する子どもがいる。」(全文)

保育者 g「ぶら下がるや登る等、危険だからと言ってあまり経験せずに成長しているように感じている。そのため、子どものやってみようとしている姿を見守ることは大事だと思います。何事も経験して、身体を動かす楽しさを味わえるようにしてあげる。すぐにくよくよしたり、怒りっぽい子どもも沢山見てきたので、運動をして心を強くしていけたらと思う。」(全文)

保育者 h「私の園では、1日の流れに決まった流れがあるので、身体を動かす遊びをする時間がなかなかないように感じます。何かを一緒にやろうと言うと、嫌という子どもも数人いるので、楽しさを伝えながら一緒に活動するのは難しいなと思います。」(全文)

保育者 i「外で遊ぶことが少ないので、慣れていない。散歩もすぐに疲れてしまう。そのため、毎日雑巾がけ競争を取り入れています。転ぶことに慣れていないのか、手をつかない子どもが多い。すぐに疲れたと言い、体操、遊戯も続かないので、ゲームを入れたりしている。」(全文)

保育者 j「家庭でゲーム遊びやテレビ、携帯を使用する子どもが多く、外遊びなどをする子どもが減っている。そのため、運動遊びの経験が乏しくなっている。親も一緒に遊ぶ遊び方が、室内遊びが多くなっているので、家庭で少しの時間でも戸外に出て遊ぶ時間を持っていけたら良い。」(全文)

5. 結言

I 県内の幼稚園・保育園・認定こども園(計 84 園)に勤務する保育者 104 名への調査の結果、現場で実践されている運動遊び・身体表現遊びは 139 種が抽出され、実に多岐にわたる遊びが展開されている状況が明らかになった。内訳は、A【器械遊び(固定された器具を

用いる遊び】24種、B【道具を用いた遊び（固定されていない器具・手具を用いる遊び）】46種（①縄を用いた遊び6種、②フープを用いた遊び3種、③ボールを用いた遊び8種、④乗り物を用いた遊び5種、⑤その他の道具・器具・手具を用いた遊び24種）、C【徒手遊び（器具・手具を用いない遊び）】40種（①鬼ごっこ14種、②その他の徒手遊び26種）、D【音楽を用いる遊び・表現遊び】29種（①ダンス6種、②その他の表現遊び・音楽を用いる遊び表現遊び23種）であった。

また、「現代の子どもの身体活動・身体表現に関する問題点」に関する自由記述からは、「動かす」、「動き」、「動く」、「遊戯」、「活動」、「運動」、「家庭」、「硬い」、「転ぶ」、「体操」、「リトミック」、「怪我」、「機会」、「疲れる」、「テレビ」、「弱い」、「力」、「ダンス」、「戸外」、「体力」、「踊り」、「動ける」、「不足」、「ぎこちない」、「バランス」、「リズム」、「行事」、「柔軟性」といった「健康」と関連するキーワードが上位抽出された。共起ネットワーク図の分析からも、身体を戸外で動かす場や機会の減少により、体力の低下、バランス力の喪失、怪我の増加、柔軟性の低下等の乳幼児の様々な健康面での問題を保育者が指摘している点が見いだされた。さらに、保育カリキュラムと乳幼児の身体活動の実態との差異により、思うように身体活動の機会が担保できないといった問題点も指摘された。

一方、本研究を進めていく中で、今後の研究上の課題も浮き彫りになった。まず、【設問1】では、「現場での運動遊び・身体表現遊びの実態」について自由記述での回答を求めたが、「リトミック」「リズム体操」「ダンス」「体操」「模倣遊び」「変身遊び」「なりきり遊び」「イメージ遊び」「表現遊び」等の言葉の定義が曖昧であり、同一の語句でも現場の保育者が意図する内容にばらつきがある可能性が示唆された。また、自由記述式という特性から、「鬼ごっこ」といった遊びの種類を記述する保育者もいる一方で、「しっぽ取り」「ケイドロ」「ヘビ鬼」「色鬼」等の具体的な遊びの名称を記述する保育者もあり、引き続きそれらを分類・統合した上でカテゴリー分けし、整理を進める必要がある。本研究の結果をふまえ、運動遊び・身体表現遊びの継続的な実態調査のための「選択式質問紙」の項目作成を今後の課題としたい。

また、【設問2】の分析結果により明らかになった、保育者が捉えた現代の子どもの健康面での問題点をどのように克服していくかが、重要な課題である。乳幼児の日々の健康を支える保育者から継続的に現場の意見を吸い上げ、データを蓄積・分析した上で、乳幼児の健康維持のための具体的な指針や対策を現場に提示する必要があるだろう。今後も乳幼児にとって望ましい身体活動の在り方を検討するとともに研究を継続し、そこで得られた知見を保育者養成校の授業や幼児教育・保育現場に還元していきたいと考える。

6. 謝辞

本研究を進める上でご協力いただきました、I 県内の幼稚園・保育園・認定こども園に勤務する幼稚園教諭、保育士、保育教諭の先生方に心より感謝申し上げます。

付記 本稿における一部は、日本保育学会第 73 回大会口頭発表「保育現場における乳幼児の身体活動に関する一考察—領域「健康」に着目して—」で発表予定の内容を含む。

7. 参考・引用文献

- i 文部科学省 (2019) 平成 30 年度体力・運動能力調査報告書
- ii 新戸 信之, 市河 勉, 三浦 累美, 三宅 孝昭 (2018) 保育内容健康領域からみた保育中の身体活動について. 松山東雲短期大学研究論集 (48), 151(96)-161(106)
- iii 田中沙織 (2010) 幼児の身体活動に対する保育者の意識に関する研究. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 教育人間科学関連領域 (59), 161-166
- iv 田中沙織 (2009) 幼児の運動能力と身体活動における関連について:—5 歳児の 1 日の生活からみた身体活動量を中心として—. 保育学研究 47(2), 112-120
- v 多胡綾花 (2018) 幼稚園・こども園における幼児の身体活動に関する研究. 湘北紀要 = Journal of Shohoku College (39), 83-96
- vi 田中 利佳, 新 友宏 (2019) からだの使い方がわからない子どもたちへの運動支援に関する調査. 鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要編集委員会 編 (2), 41-50
- vii 前掲 (v と同じ)